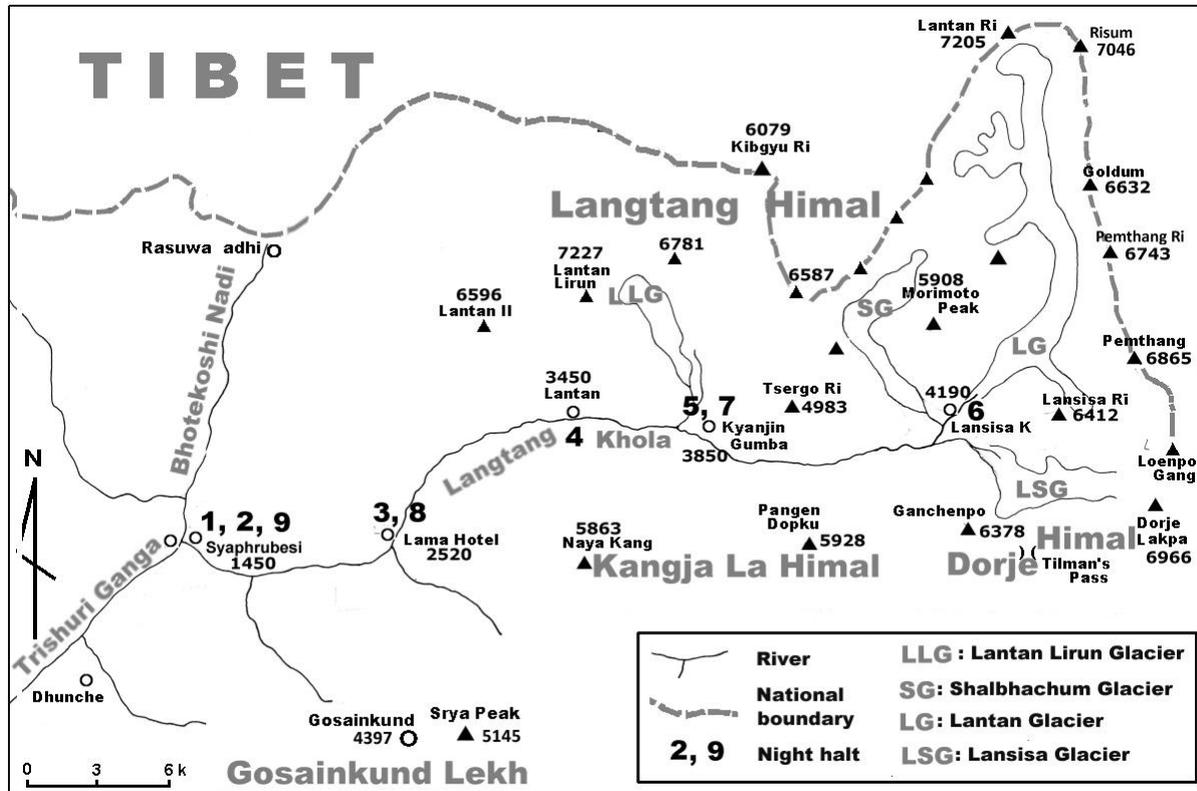


私はインドで会議があり、デリー経由で13日にカトマンズに入った。また、ツアー終了後はランタン谷の追加野外調査のため31日までネパールに滞在する予定であった。ほかの日本人一行12人はタイ航空で14日午後にカトマンズ到着、タメルのシャクティホテルに投宿した。このホテルはトリブバン大学地質学教室推奨で、朝食つき2人部屋が1泊30ドル程度(1人15ドル)とまずまずの値段で快適なホテルであり、欧州系の客が多い。



ランタン谷周辺の地図とツアー日程 太数字は宿泊日程

ランタン谷トレッキング

- 10月15日にカトマンズをジープで出発し、22日にヘリで救出されるまでの日程を以下に記す。
- 15日 カトマンズ発—シャブルベシ着 (標高1450m) 同地泊
 - 16日 シャブルベシ周辺の地学見学
 - 17日 シャブルベシ発—ラマホテル着 (2520m) 同地泊
 - 18日 ラマホテル発—ランタン着 (3450m) 同地泊
 - 19日 ランタン発—キャンジンゴンパ着 (3850m) 同地泊
 - 20日 キャンジンゴンパ発—ランシサカルカ着 (4190m) 同地泊
 - 21日 ランタン氷河往復後ランシサカルカ発—キャンジンゴンパ帰着 同地泊
 - 22日 キャンジンゴンパからヘリで救出されてカトマンズ着 B&B病院に入院・救急手当て
 - 23日～30日 B&B病院で入院治療
 - 31日～11月1日 カトマンズ発—バンコク経由で帰国

10月14日 ホテルの夕食前に参加メンバーの自己紹介とツアー概要の講義があった。主催者側

を除く日本人参加者はここ数年ジオプランニング社が主催する地学ツアーの常連となっている高校・大学の教員4人の他、私の知人などが7人で、2人は北大山の会、2人は北大地質学鉱物学教室の同期の川原紀夫氏と妹君、2人は近所の友人、プラス私の妻の彬（よし）で、全体で男8人、女3人であった。

8月15日 朝8時にジープ3台に分乗してホテルを出発、カカニ丘陵を越えて標高500mのトリスリ河に下り、トリスリバザールで昼食。ゴザインクンド西の急な山腹斜面に刻まれた凹凸道を50kmほどのつらく長いドライブで夕方早くに今回の車の終点シャブルベシ（標高1450m）に着いた。ここの宿は比較的新しいホテル・スカイ、部屋もなかなかきれいだ。夕食前に集まって明日の予定と予習をした。

16日 シャブルベシ西の急斜面にジグザグを切っている車道を、道路側の新鮮な露頭を観察しつつゴダンへ通じる峠（ロンガ・シャンジャイ峠、標高2237m）に登った。ランタンリルンII峰や、チベットの白い峰々（ソンイェンヒマール）が美しい。夕方は皆でトリスリ河本流河原にある小さな露天風呂を楽しんだ。

17日 今日からはいよいよランタン谷トレッキングだ。朝7時頃に出発し、林の中の細いトレックコースを地形、地質、岩石を観察しつつバンブーロッジ着（1950m）1時半頃でランチ。ここ



ロンガ・シャンジャイ峠で



シャブルベシの露天風呂を楽しむ

まで2箇所ほどトレールが崩れており、結構危険なところがあった。慎重なパーティーならザイルを使うところだろう。バンブーロッジは左岸から大きな支沢（タンマルチェ谷）が入ってきており、土石流災害が怖いところだ。ここからリムチェ（2440m）までは結構な登り、本流も急になり、音を立てて激しく流れている。リムチェを過ぎると谷はゆるくなり、1kmほど先のラマホテルまでは楽な散歩道だ。ラマホテルでの宿はラマゲストハウスだ。

18日 7時半ホテル出発。ラマホテルから上は谷はかなり広がっている。左岸のチャンタンパリ谷からは膨大な扇状地・崖錐堆積物が流出して本流を埋めている。このあたりから氷河で削られたと見られるランタン谷の兩岸の急崖の上部がときどき望見され、木々の間からはついにランタンII峰が姿を現した。続いてランタンリルン主峰も雲間にとときどき望まれるようになった。8時半頃、グンラチョークに着き、林の上に聳えるランタンリルンの峰々の眺望を楽しむ。500mほどでトンマ着、ここからは上流のU字谷の形が明瞭に見られるようになった。トンマを過ぎると上流のU字谷はますます明瞭になり、一方下流は見事なV字谷である。



ラマホテルに到着



木々の間にランタンII峰がくっきりと



下流はV字谷



上流はU字谷

リムチェ〜トンマ間の辺りが昔のランタン谷の本流氷河末端で、リムチェの急な登りはそのエンドモレーンの末端斜面だったのだろうなどと想像される。ゴダタベラ着 11時半頃で昼食。すでに林はまばらになり、広いU字谷の谷底のゆるい快適な散歩道である。陽光の下、U字谷の底に広がるモレーンを削った河岸段丘や、その上を覆う崖錐の上を走るゆるいトレック路をのんびり歩いてこの日の宿、標高 3450mのランタン村着は 4 時を過ぎて



ツエルゴ・リ峰 (左) とガンチェンボ峰 (右奥)

いた。ランタンの少し手前からは今回のツアーの目指すツエルゴピークとランタン谷奥の美しいヒマラヤ巒を纏うガンチェンボ峰がくっきりと姿を現した。ランタンではビレッジビューホテル泊。すでに 3000mを超えているが、チームのメンバーはみな元気一杯だ。

19日 今日はランタンにもう 1 泊する予定だったが、皆元気なので、キャンジンゴンパ (以後キャンジンと呼ぶ) まで行ってしまうことになった。キャンジンはここから 3.5 kmほど上流で、標

高 3850mである。7 時半過ぎに出発、のんびりと歩いて 12 時頃キャンジン着、昼食後自由時間で、それぞれに村の周囲の散歩となった。私は元気の良い石島君ら数人を案内して村の北に聳えるキモシュピーク (4545m) に登ったが、あいにくのガスで、期待した展望はよくなかった。雲間にランタンリルンやその東斜面を眺めてから下った。

20 日 私はランタン谷の上流 14kmほどにあるランタン氷河までの地質調査を予定していたので、ライとバタライ両氏と 3 人でポーター 2 人に 1 泊のキャンプ装備を持たせてキャンジンを早朝出発した。他のメンバーは元気な 5～6 人はツエルゴピーク登山へ、高所が少し心配になった北大同期の河原氏ら 3 人は村の周囲を散歩してからランタンの少し下、チャンシャブ (3192m) あたりまで下って泊まることになった。妻は少し具合がよくなさそうなので、河原氏らと一緒に下るように勧めたが大丈夫ということで、馬を借りて村の周囲を散策することになった。出発して 30 分ほど、村の南東に 1kmほど歩き、ヤラ氷河から流れる巨大なファンまで、散歩組が同行し、見事なランタンリルンをバックにグループ写真をとるなどして別れた。



ランタンリルン峰の足元のキャンジン村

私たち 5 人はさらに 13kmほど上流のランシサカルカ目指して地質調査をしつつ歩き出す。飛行場跡を過ぎて谷が東に曲がると、ランシサ・リ峰が特徴ある双峰の姿を現す一方、背後のランタンリルンは見えなくなった。ナムタンの部落を過ぎるとすぐにサルバチョム氷河の膨大なエンドモレーンで、これを登りきると今日の目的地ランシサカルカが望まれた。ランタン谷最上流の白い峰々が美しい。ランシサカルカ着は 17 時ころだった。粗末な石室があり、我々はその中にテントを張った。

21 日 朝、暗いうちに起きて枯れ木を集めて大きな焚き火を囲む。朝日に輝く峰々が美しい。南西サルバチョム氷河のエンドモレーンの上にはカングジャラヒマールの主峰パンゲンドプクの双耳峰 (5930m)、南方には秀麗なガンチェンポ (6378m)、南南東ランシサ氷河のエンドモレーンの上には広いウルキマン (6143m) とその東峰 (6074m)、東北東ランタン谷本流上流方向には、真っ白く幅広いペンタン峰 (別名 Dome Blanc で 6830m) が姿を見せている。

朝 7 時ころ、ランタン氷河を目指して出発し、エンドモレーン頂上付近に 10 時半ころ到着した。岩屑で埋まったランタン氷河、その東に南北に連なる主稜線にはペンタン峰、ペンタン・リ峰



ランタン岩屑氷河とその左岸に聳える広いペンタン峰 (6830m) と鋭いペンタン・リ峰 (6342m)



ランタン氷河の入り口に聳えるランシサ・リ峰 (6145m)



夕陽に輝くガンチェンボ峰 (金澤重敏氏提供)



キャンジンの正面に屹立するナヤ・カン峰 (5863m)

(6342m)、ゴールドラン峰 (6441m) などの峰々が連なっている。稜線の西斜面の岩壁にはくつきりと花崗岩の貫入形態が認められる。周囲の景色や地質の様子を記録し、11時過ぎに下山開始、真っ青な空の下、周りの峰々を振り返りつつ、キャンジンゴンパに5時頃帰着した。

高山病

21日夕方、ランシサカルカからキャンジンに帰着してみると、皆はツエルゴピーク登頂の興奮でざわついていたが、妻は調子が悪く、部屋で寝ていた。同室の勝田友子さんが、妻はよだれをた

らし、応答がおかしいと教えてくれた。様子を見たが、ひどくおかしいというわけでもない。しかし足元はおぼつかなく、すぐに低所下って行きたかったが、本人はすでに自分で歩けないので、馬かかごにのせて降りるしかないが、その準備はすぐにはできないし、すでに夕暮れがせまっている。さらにその翌日、リムチェから下の細い危ないトレールの通行は難しい。ガイドと相談し、これはヘリを呼ぶしかないということになり、早速連絡をつけてもらったが、すでに遅く、明日朝一番に来るということになった。夜、妻はとりわけて苦しむこともなく、静かに寝ていたようだ。

22日 朝、妻をトイレに連れて行ったが、鍵を開けて出てこれなくなり、2階の便所の窓から入って救出した。ヘリポートまで両側から抱えて連れて行き、時間通り早朝7時半に到着したヘリで私と妻の2人は20分ほどのフライトでカトマンズ空港着、救急車でB&B病院に運ばれた。あとで聞いたことだが、この病院はカトマンズ指折りの大病院で、とりわけ外国人によく利用されているようだ。

病院の救急室では、丁度前日にエベレストの診療所から帰ってきたという高山病専門の医師が待ち構えており、診察してくれた。彼によると、妻は脳にも障害を受けた重度の高山病であり、生死を含めてこの後どうなるかは全くわからず、この2-3日が勝負だという。まずは酸素吸入と点滴などの治療を続けるため、救急特別室で入院となった。昼過ぎに主治医の内科医に加えて、脳神経科医が担当ということでお2人に話しを伺ったが、やはり非常に重度の高山病であり、今後どうなるかは全く分からないとの診断だった。私は京都在住の妻の母親(97歳)を呼ぶ方策を本気で考えたが、いろいろと大変であり、結局1-2日様子を見ることにした。

23日~31日 23日から25日まで妻は適当な返事はするものの、事態の理解はできず、起きているときは点滴や尿チューブをひどく嫌がって強引にはずそうとし、付き添いの看護婦や私を困らせた。24日頃には主治医から生命の危険はなくなったが、あとはどこまで脳が回復できるかが問題と言われた。このころから口から流動食を摂取できるようになり、26日からは事態を少しずつ理解し、食事も美味を喜ぶようになってきた。26日頃からは友人たちがお見舞いに来てくれるようになり、美味しい日本食を届けてくれる人もいて妻は大いに喜んだ。



B&B病院の正面玄関



毎日診察に来てくれた医師団

29日頃には立ち振る舞いもやや正常になってきたので帰国の希望を主治医に伝えた。主治医はあと1週間は無理だと言っていたが、私たちの強い希望で、「最も早くて31日出発でなるべくも

っと遅く、そして飛行機は必ず付き添い付、ビジネスクラスで、バンコクに一泊することと、帰国後すぐに専門の病院で診察・治療を受けること」を条件として退院許可を出してくれた。一方、脳神経科医は「私は許可しないが、主治医の判断には従わざるを得ない」とのことだった。

31日、私たちはタイ航空のエコノミー便で、途中バンコクで1泊して11月1日に帰宅し、翌日に橋本市民病院で診察を受け、それから1週間、毎日点滴を受けに通院した。この間、車の運転はしないようにとの注意を受けた。結局11月7日に通院治療はすべて終わり、その後は12月10日ころまで、2～3会経過観察で通院した。

12月以降 妻はこのあとは普通に暮らすことができたが、私の目から見ると完全に元に戻ったようではなく、判断が遅く、人当たりは柔らかだった。罹病前と殆ど変わらない状態になるにはこの後半年ほどかかった。なお、彼女は10月21日から25日の間の5日間については全く記憶が飛んでおり、その後もいつになっても思い出すことはできなかった。

経費 今回の事件で特別にかかった費用の記録はすでに亡くなっているが、記憶を手繰ってみると多分以下のようなものである。①ヘリコプターチャーター料金：約15万円、②B&B病院入院治療経費：薬30万円、③帰国フライト航空券2人分：約25万円。以上で総額70万円程度であり、これはすべてVISAカード付帯の海外旅行障害保険でカバーされた。

おわりに

妻はもともと3000mを超えるあたりから高山病を発症することはわかっていた。しかしこれまで、富士山やヒマラヤトレッキングでの3800m前後までの経験で、吐き気や頭痛はあったが、その程度で済んでいた。しかしサルファ剤アレルギーがあるためにダイヤモンドは服用できず、そうかといって他の対策も特にたてず、調子が悪くなったら下ればよいと考えていた。実際のところ本人は3450mのランタンを過ぎてもいたって元気で、他の人たちも問題なかったので高度順応を考えて2泊の予定をしていたランタン泊りを1泊にしてキャンジンに向かった。これが最初の判断ミスだったのであろう。このためキャンジン泊が予定の2泊から3泊になった。

翌日19日のキャンジンまでの歩きとその夜の泊りも全く問題なかった。20日朝は同室の勝田さんに勧められたため、妻はツエルゴピーク登山に参加せず、馬で村の周りを散歩した。この原稿を書いている2016年6月に本人に聞いてみたところ、そのときはなんともなかったとのことであり、それまで各所でなんとか経験した吐き気や頭痛などの高山病特有の症状はまったくなかったとのことである。しかし、当時多分勝田さんは妻の調子があまりよくないとみたのだろう。私もこの日の朝、本人の調子はあまりよさそうには見えなかったもので、散歩の後に河原氏らと下るように勧めたのだが、妻はなんとも無いとして下りなかったのである。

ここで妻に必ず下りるようにと私が強く言うべきであったし、様子を見るためにランシカルカ調査を取りやめて妻を見守っていたら事態は違ったことになっていたかもしれない。しかしこのときの私は、本人の様子はそれほど悪いとは思えず、それほど重大な問題になるとは想像もつかなかったのである。

結論として、今回の妻の高山病罹病は、妻の罹病高度である3200m以上に4泊96時間以上滞在したことが直接原因だった。このことの重大性に気づいて、以下の対処をしていれば今回ほど深刻な事態には至らなかったであろう。

- ①ダイヤモンドに代わる対高山病薬を準備しておき、18日朝ラマホテル出発時から事前服用させるべきであった。
- ②高度順応を考えて当初予定していたランタン2泊を1泊にしたのは間違いであった。なお、高度順応のためにはランタンでなく、もう少し高度の下がったチャンシヤプあたりでの2泊を確実に実行するのがよいと思われる。
- ③キャンジン1泊の後、妻をチャンシヤプに降ろすべきであった。

以上、すべて私がメンバーの高山病予防に関して十分な対策を考え、実行できなかったわけであり、痛切な反省を迫られた。この数年後から私は自分が主宰して学生達をヒマラヤ実習ツアーに毎年連れて行くことになったが、毎回この2008年の経験を思い出して高山病対策を考えるようになった。